

日本英文学会東北支部 第78回大会資料

時：2023年12月9日（土）

所：東北学院大学五橋キャンパス
（仙台市若林区清水小路3-1）

日本英文学会東北支部事務局

〒960-1296 福島市金谷川1番地

福島大学 人間発達文化学類 高田英和研究室内

電話：024-548-8156／E-mail：tohoku@elsj.org

日本英学会東北支部

2023年度 大会役員一覧

(敬称略)

支 部 長	福士 航			
副 支 部 長	大貫 隆史			
理 事	井出 達郎	大河内 昌	大西 洋一	
	大貫 隆史	木村 宣美	三枝 和彦	
	境野 直樹	島 越郎	高田 英和	
	竹森 徹士	福士 航		(五十音順)
大会準備委員	酒井 祐輔	大野 朝子	相田 明子	
	深谷 修代	堤 博一		
開催校委員	石橋 敬太郎			
事務局	高田 英和 (事務局長)	川崎 和基 (事務局長補佐)		
	佐藤 元樹 (事務局員)			

* 懇親会は開催しません。

日本英文学会東北支部第 78 回大会プログラム

時：2023 年 12 月 9 日（土）

所：東北学院大学五橋キャンパス・講義棟（L 棟）
（仙台市若林区清水小路 3-1）

理事会 11 時 00 分より（L717 教室）

開会式 12 時 30 分より（L712 教室）

□開会の辞

日本英文学会東北支部長 福 士 航

研究発表

第 1 発表 13:00 – 13:30 第 2 発表 13:30 – 14:00
第 3 発表 14:00 – 14:30

英米文学部門（L712 教室）

司会 山形大学教授 中 村 隆

1. 文化とイデオロギー——「文学の商品化」から見る **George Gissing** の美学

東北大学大学院 太 田 隆太郎

司会 東北工業大学教授 鈴 木 淳

2. 閉鎖的空間との訣別——『恋の霊』と変貌する家の諸相

東北学院大学大学院 丹 野 海 晴

3. 【発表なし】

英語学部門 (L713 教室)

1. 【発表なし】

司会 宮城教育大学准教授 戸塚 将

2. *Wh-in-situ* における非構成素省略

東北大学大学院 荻野 博己

3. 譲歩節における疑問縮約について

福島大学准教授 佐藤 元樹

SYMPOSIA (14:45 – 17:00)

英米文学部門 (L712 教室)

Robert Tressell, *The Ragged Trousered Philanthropists* を読む

司会・講師 慶應義塾大学名誉教授 武藤 浩史
講師 東北大学教授 大貫 隆史
講師 成城大学教授 木下 誠

英語学部門 (L713 教室)

近年の生成文法理論の展開とその可能性

司会・講師 都留文科大学講師 堤 博一
講師 福岡大学講師 中島 崇法
講師 弘前学院大学講師 齋藤 章吾
講師 福井大学講師 廣川 貴朗

研 究 発 表

英米文学部門

司会 山形大学教授 中 村 隆

文化とイデオロギー —— 「文学の商品化」 から見る George Gissing の美学

東北大学大学院 太 田 隆太郎

ジョージ・ギッシング (George Gissing, 1857-1903) は、文学の「商品化 Commodification」が加速する 19 世紀末の英国において、社会の変化を克明に記述していた作家として近年再評価が進んでいる。これまでのギッシング研究において主流となってきたのは、John Goode や Fredric Jameson による、商業的価値<対>文化的価値という矛盾に注目したイデオロギー論である。しかし、本研究では、イデオロギー論によって示された商業的価値<対>文化的価値という一つの静的な商品化の構造を、自己と社会の関係性、もしくは小説フォームと社会の関係性、という動的なプロセスの中で読解したい。具体的には、Adrian Poole の文化研究を参照しながら、1880 年代のロンドンの文芸市場を描く *New Grub Street* (1891) の分析を通じて、書き手と社会の微妙な距離感が、どのように小説の中で劇化されているかを解明したい。加えて、商品化という過程自体を芸術化する小説のフォームが、文学の商品化に対してどのような交渉を行っているかについて論じていく。

司会 東北工業大学教授 鈴木 淳

閉鎖的空間との訣別——『恋の霊』と変貌する家の諸相

東北学院大学大学院 丹 野 海 晴

トマス・ハーディ (Thomas Hardy, 1840-1928) 最後期の小説である『恋の霊』(*The Well-Beloved* 1897) の主人公ジョスリン・ピアストン (Jocelyn Pierston) は終始一貫して実存的問題を抱えている人物である。彫刻家ピアストンは女性の中に現れては消える「恋の霊」という理想を追い求め続けるが、その究極的な目的は、人生の支柱となる家庭を獲得することである。物語の幻想的性格に隠蔽された主人公の孤独という極めて現実的な問題は、いくつもの「家」を通して戦略的に描かれている。

本発表は『恋の霊』に描かれる数々の「家」の描写を中心に、ピアストンの実存的問題を分析する。「家」という生活空間を人間の実存に深く関与する機構として捉え、ピアストンの年齢とともに移り変わる「家」の現象学的意味の変遷を辿る。最終的に本作品を、社会のブルジョワ化とロマン主義的美学の探求という文化的背景の果てに登場した、世紀末に生きる個人のアイデンティティ確立の物語として読むことがねらいである。

Wh-in-situ における非構成素省略

東北大学大学院 荻野博己

間接疑問縮約の派生は、wh 句の CP への移動とそれに続く TP 削除を伴うという移動分析が一般的である。一方、wh 句が元位置に留まったまま、TP 内の wh 句以外の要素が削除を受けるという in-situ 分析も存在する。本発表では Kimura (2010)の提案を基に、in-situ 分析を支持するさらなる証拠として wh 目的語を伴う派生における間接疑問縮約と動詞句省略の適用可能性の違いを挙げ、この違いが in-situ 省略の適用条件と経済性の条件によって説明できると提案する。また、一般に間接疑問縮約や動詞句省略と呼ばれる操作を null-Spellout として捉え、Spellout 領域となる統語構成素のみに適用されると考える一方、in-situ 省略は PF での隣接性条件違反回避のために線形化後に適用される救済措置であると考え、in-situ 省略が非構成素を対象に適用されることにも説明を与える。

譲歩節における疑問縮約について

福島大学准教授 佐藤元樹

本発表では、疑問縮約の一種である concessive sluicing (Merchant 2001) /unconditional sluicing (Elliot and Murphy 2019) が繫辞文以外の基底構造を許す可能性について論じる。譲歩節や無条件節の疑問縮約は、繫辞文を基底構造にもち、統語的同一性条件に従わない削除が適用されることが知られている。本発表では、そのような節省略の基底構造が繫辞文に限定されないことを、付加詞の wh 句と swiping から示す。この二つの統語環境では、Merchant (2001)で指摘されているように、繫辞文が許されない。譲歩節や無条件節における節省略が繫辞文に限定された現象であるとする、付加詞の wh 句や swiping 型の省略文は不可能であると予測される。本発表では、この予測が正しくなく、譲歩節や無条件節では繫辞文以外の統語派生の可能性があることを示す。

SYMPOSIA

英米文学部門

Robert Tressell, *The Ragged Trousered Philanthropists* を読む

司会・講師 慶應義塾大学名誉教授 武藤 浩史
講師 東北大学教授 大貫 隆史
講師 成城大学教授 木下 誠

1901年から1910年にかけて南英ヘイスティングスで塗装工、看板書きとして働いた建築現場体験を描いたアイルランド系イギリス人 Robert Tressell による知る人ぞ知る労働者小説の古典 *The Ragged Trousered Philanthropists* (1914) は、わが国でも優れた邦訳『とんまの里』(村木淳訳、1971年)があることさえほとんど知られず、20世紀イギリス文学研究者でも読んでいない者は少ない。

中流階級の作家が調べて書いた (Gaskell, Mayhew, Gissing, Jack London) ものとも、ちょっと働いて書いてみた (Orwell, 斎藤幸平) ものとも、労働者階級の子弟が労働以外の生活を書いた (Arthur Morrison, D. H. Lawrence) ものとも異なる視点を持つ実際の労働者が労働の現場を描いたこの小説は他に類を見ないユニークなもので、もっと知られてよい。労働現場の具体的な細部とともに、そこに見られる暴力的なヒエラルキーと相互扶助の可能性・不可能性、非正規雇用の不安定な構造、それらが家庭生活に与える影響などがよく分かる。主人公が信じる社会主義とそれを拒絶する他の現場労働者の食い違い、Ruskin, Morris の系譜に連なる美へのこだわりなども面白い。George Orwell, Raymond Williams, Raphael Samuel らが絶賛するこの小説をここに紹介すると共に、さまざまな読みの可能性を参加者の皆さんと共有したい。

Robert Tressell, *The Ragged Trousered Philanthropists* の社会主義と霊性の文脈

武藤 浩史

David Graeber は、その主著 *Debt* において、紀元前5世紀前後の仏教、儒教などの世界思想が暴力的な貨幣経済への反発から生まれたとするが、さらに加えて、その結果、宗教とマーケットを二項対立的に思考する傾向が生じたと言う。しかし、社会主義には、この二項対立的思考以前に戻ろうとする力、それを脱構築しようとする力が働いており、Marx の宗教批判の表層的理解を超えて、Ernst Bloch を Charles Taylor や磯前順一と併せて読めば、社会主義と宗教性の繋がりは一応は理解できる。そこから、次のような Tressell の著者序を締めくくる文言—— ‘Because it is true it [*The Ragged Trousered Philanthropists*] will probably be denounced as a libel on the working classes and their employers, and upon the religious-professing section of the community. But I believe [...] it will be evident that no attack is made upon sincere religion.’ (Author’s Preface 2) ——が出てくるわけだが、この文言を同時代の言説に繋げてゆくと何が言えるのかを考えてみたい。思いつくままに名を挙げると、Charles Dickens, Mary Augusta Ward, Robert Blatchford, Ernest Bax, James Joyce, D. H. Lawrence らの仕事との比較論考になるのではな

いか。

Raymond Williams と Robert Tressell ——「社会のなかで書くこと／社会のなかの書きもの」とは？

大貫 隆史

Raymond Williams は、まとまった議論も含め、何度か *The Ragged Trousered Philanthropists* について言及している。本報告では、それらを紹介しながら、ウィリアムズと Tressell のあいだの連続性や非対称性のようなものを明らかにしていきたい。ウィリアムズの *The English Novel from Dickens to Lawrence* (1970) では短いながらも印象的な記述がトレッセルに対してなされていて、そこでは、書き手（トレッセル）とワーキング・クラスの人びととの関係が、創造的に変化しうるのはいかにしてか、といったような問いを見出すことができそうだ。「イングランド小説」の核となるこうした問いを、*Writing in Society / The Robert Tressell Lectures 1981-88* に収められたウィリアムズの講演なども参照しつつ、考えてみたい。また、ウィリアムズのウェールズ文化・文学関連の論集である *Who Speaks for Wales: Nation, Culture, Identity* 所収の論考では、少し異なった角度から議論が展開されているのだが、時間が許せばそれにも言及してみたい。

小説が「本当のことである(being true)」とは ——サッチャリズム／ポストトゥルースの時代に *The Ragged Trousered Philanthropists* を読む

木下 誠

The Ragged Trousered Philanthropists の序言に、Robert Tressell は次のような言葉を記している。「本作品には少なくともひとつ長所がある——本当のことである(being true)、という点だ。わたしはなにひとつでっちあげていない。物語の中には、わたしが直接目撃していなかったり、確実な裏付けが取れなかったりした場面や出来事は、一切含まれていない。」本作品は作り話ではない、とトレッセルは言っているようである。だがその一方で、この主張の直前に、「社会主義の主題」を扱った「学術論文やエッセイではなく、小説である」とも述べている。小説すなわち虚構の物語であることと「本当のことである」こと、このすでに語り尽くされているかもしれない関係性を、1980年代イギリスのサッチャリズムの文脈において再考してみたい。というのも、トレッセルが職人として働いていたヘイスティングスで1980年代にロバート・トレッセル記念講演が毎年開催され、その1981年から88年までの講演記録が論文集として出版されているように、本小説が注目されるようになった（あるいは再発見・発掘された）きっかけのひとつは、サッチャリズムの政治文化への異議申し立てにあると考えられるからである。本発表ではそこから、ポストトゥルースの時代とも言われる現在、本小説を読むことの意義についても合わせて考察してみたい。

近年の生成文法理論の展開とその可能性

司会・講師 都留文科大学講師 堤 博 一
講師 福岡大学講師 中 島 崇 法
講師 弘前学院大学講師 齋 藤 章 吾
講師 福井大学講師 廣 川 貴 朗

近年、生成文法においては Strong Minimalist Thesis の追究の観点から、その基本的想定や道具立てに根本的な見直しを加えられている。Chomsky (2021)では作業領域の理論や外的及び内的併合いずれにも適用されるコピー理論が、そして Chomsky (2023)ではボックスの概念に基づく併合によらない転移の理論が提案されたが、これらの統語部門に関する新たな想定は、それ自体のさらなる洗練や、これを取り巻く解釈部門の構成の見直しを要求するとともに、さまざまな諸構文の分析の新たな可能性を導く。本シンポジウムでは、4人の講師が、それぞれの研究テーマの観点から、現在の生成文法の枠組みにおける統語部門の構成や、インターフェースシステムにおける解釈、具体的な構文の分析に対する示唆をめぐって議論を展開する。具体的には、堤が Chomsky (2021, 2023)の理論的背景を紹介したのちに、統語表示の意味解釈に関わる研究を、齋藤が統語表示の音韻解釈に関わる研究を、中島が作業領域の理論の観点から付加および等位構造に関わる研究を、廣川が非名詞句主語や主語の後置を含む構文に関わる研究を発表する。本シンポジウムでは、常に発展を続ける生成文法の現在の論点を多角的視点から整理し、今後の展望についての手がかりを得ることを目指す。

作業領域における付加構造・等位接続構造の生成

中島 崇法

近年の極小主義理論では、併合 (Merge) の定義が改められ、作業領域 (Workspace, WS) から作業領域への写像として再定義されている (Chomsky 2019, 2020, 2021, Chomsky, Ott, and Gallego 2019)。Nakashima (2022)はこの枠組みに基づき、作業領域 $WS = [\alpha, \beta]$ が与えられた場合に統辞体 α と β との併合が4通りの作業領域 (i) $WS' = [\{\alpha, \beta\}]$, (ii) $WS' = [\{\alpha, \beta\}, \alpha]$, (iii) $WS' = [\{\alpha, \beta\}, \beta]$, (iv) $WS' = [\{\alpha, \beta\}, \alpha, \beta]$ を生み出しうると提案した。そして付加構造は (ii) (iii)のタイプの併合によって生成されると主張し、付加詞の島の条件、 θ 役割の欠如、ラベルの不可視性、再構築効果における項と付加詞の非対称性を説明した。

しかしながらこの分析には、決定性 (determinacy) の原理を独立に規定する必要があるという理論的問題と、付加詞の移動が可能であるという事実を説明できないという経験的問題があった。そのため本発表では、Chomsky (2021)の最小探査 (Minimal Search) の概念を用いて Nakashima (2022)の枠組みを発展させつつ、これらの問題点を解決する。

加えて、Nakashima (2022) では追求されなかった(iv)のタイプの併合の帰結を探る。具体的には、等位構造は (iv)のタイプの併合によって導入されると提案し、等位構造制約や等位項間の c-統御関係の欠如といった等位構

造の諸性質について説明を試みる。

ボックス理論に基づく転移現象の線形化

齋藤 章吾

一般的な生成文法の枠組みにおいて、線形化は統語構造に基づいて行われると仮定され、解釈位置と発音位置のズレを生じさせる転位と呼ばれる現象は、統語構造上の移動/内的併合に基づいて起こると分析されてきた。一方、Chomsky (2023) のボックス理論において、フェイズを越える転位現象は、発音位置までの移動/内的併合に基づいて起こるのではなく、「ボックス」と呼ばれる領域に入った要素がフェイズをまたいだ位置の要素からアクセスされることで起こると仮定されている。しかし、Chomsky (2023) において、ボックス要素へのアクセスに基づく外在化のメカニズムは明らかにされていない。本発表では、ボックス理論に基づく転位現象の線形化に対して、新たな線形化メカニズムの提案を試みる。具体的には、「2 項関係にある要素どうしを隣接させよ」という原理に基づいて複数の線形化プロセスが起こり、それらの結果が結合されることで最終的な線形順序が得られると提案する。このメカニズムのもと、フェイズを越える転位現象は、構造関係に基づく線形化とボックス要素へのアクセスに基づく線形化の 2 つの結果が結合されることで引き起こされる。本発表では、この線形化メカニズムに基づいて複数の現象を分析すると共に、従来の線形化メカニズムとの比較を試みる。

主語位置および左周辺部への移動について

廣川 貴朗

Chomsky (2021, 2023) は、主語は IP 指定部に内的併合を起こし、argument of predication の意味役割を付与されると主張する。一方、Chomsky (2023) は、これまで左周辺部への内的併合を起こすと考えられてきた要素は、 v^* フェーズにおいて内的併合を受けた際にボックスに入り、さらなる内的併合は起こさず、C のフェーズにおいて C からアクセスされることで C-I インターフェースによって解釈されると主張する。本発表は、左周辺部や主語位置の関係する (i) 非名詞句が主語となる現象、(ii) 主語が後置される現象等に対して Chomsky (2021, 2023) が与える帰結・示唆について考察する。

- | | | | |
|------|----|--|---------|
| (i) | a. | [_{CP} that Shelby lost it] is true | [CP 主語] |
| | b. | [_{PP} under the bed] is a good place to hide | [PP 主語] |
| | c. | [_{AP} very tall] is just how he likes his bodyguards | [AP 主語] |
| (ii) | a. | Down the hill rolled John. | [場所句倒置] |
| | b. | “I am so happy”, thought Mary. | [引用句倒置] |

極小主義における生成文法では長きにわたって転移現象が内的併合によって説明されてきた。すなわち、 θ 役割の観点から解釈される位置とは異なる位置に表面上生起する転移要素は、前者の位置に外的併合されたのち、後者の位置に再び内的に併合されると考えられてきた。しかしながら Chomsky (2023)では、転移要素はそれが属するフェーズの端までは内的併合を受けるが、後のフェーズにおいて「最終着地点」までは内的併合を受けず、単に「アクセス」されるだけであるとされる。内的併合は、文の線形化における転移現象を導くだけでなく、束縛や作用域などの意味的特性を規定する C 統御関係を導く要因であったが、Chomsky (2023)の新たな枠組みにおいて、これらの意味関係をどのように保障するかという論点が生じる。本発表では、形式意味論の分野での先行研究の紹介も交えながら、統語構造に反映されない形での作用域付与という可能性を検討する。また、作用域と束縛の問題が交差する「弱交差」現象などにも言及し、現在及び今後の生成文法研究において C 統御の果たす役割についても考察したい。

○大会会場（東北学院大学五橋キャンパス）へのアクセス

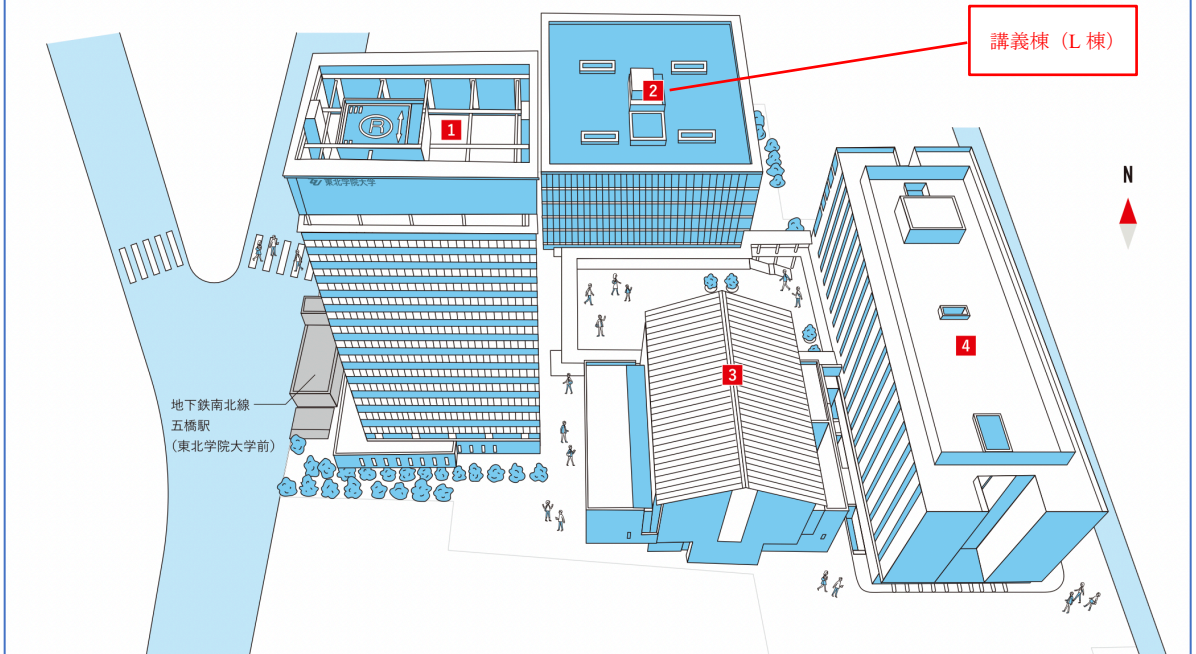


周辺地図

- ・ JR「仙台駅」から徒歩約15分
- ・ 地下鉄南北線「五橋駅（東北学院大学前）」直結
- ・ バス停「五橋駅」から徒歩約1分

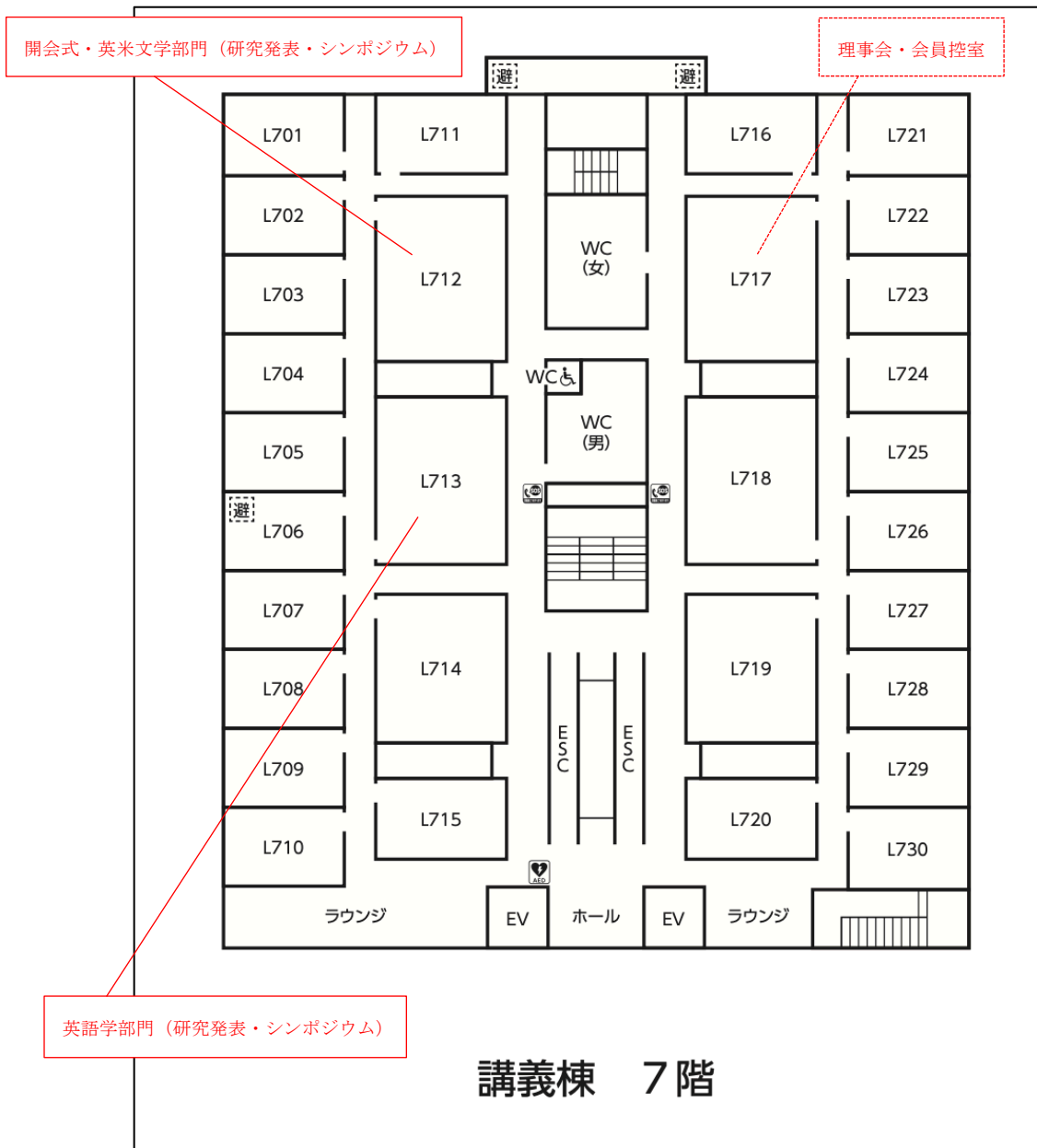
五橋キャンパス

市中心部に新設された五橋キャンパスは、4つの建物が渡り廊下「TGUリング」でつながる、文理融合型キャンパスです。



キャンパス・マップ

○施設平面図（講義棟 [L棟] 7階）



英語学部門（研究発表・シンポジウム）